

ドルトン・プランの成立過程と ヘレン・パークーストの思想形成

兵庫教育大学 宮本健市郎

The Development of the Dalton Plan and the Growth of the Thought of
Helen Parkhurst

Ken'ichiro MIYAMOTO

はじめに

学年と学級を固定して、一定の内容を同時に多数の生徒に教授する一斉授業の形態は、欧米の先進国や日本など、19世紀の末に義務就学制度を確立した多くの国で広く普及し、20世紀の学校教育の特徴のひとつとなっている。20世紀になって行われた様々な教育方法の改革は、一斉授業の改革の歴史であったと言ってもよいであろう。我が国でも明治時代に一斉授業が普及して以後、大正新教育や戦後教育改革の中で、しばしば一斉授業を改革し、教育を個別化することが提唱された。教育を個別化することは現在でもなお日本の教育改革の主要なテーマのひとつとなっている。

一斉授業に対する批判は、19世紀末から20世紀前半にかけての世界的な新教育運動のなかで明確に現れていた。その要点は、生徒ひとりひとりの能力の個人差や個性の差異に対応できないこと、および、生徒の聴講を前提にしており、生徒をいつも受け身にさせていること、という2点にまとめられる。そこで、一斉授業を打破して、教育を個別化するとともに、生徒の自発的あるいは能動的な活動を保障することが、20世紀前半の新教育運動における教育方法改革の中心的な課題となり、様々な教育方法が開発された。中でもアメリカで開発されたウイネトカ・プランとドルトン・プランは、そのような教育方法として、1920年代に世界中の注目を集めた。とくに、ドルトン・プランは、教育を個別化した実践（個別教授法）として、または、自学主義の教育方法として、アメリカのみならずイギ

リス、中国、ソ連、日本などにも大きな影響を与えた。¹⁾

だが、1920年代の新教育運動は、教育を個別化することのみを目的としていたのではない。それと同時に、学校を共同社会にすること（学校の社会化）をも主要な目的としていた。都市化と工業化が進んだ19世紀末以後、かつての安定した人間関係に支えられた共同体は失われつつあった。そこで、学校での集団活動などを通して子どもの社会性を形成し、学校を共同社会にすることが目指されたのである。

したがって、教育の個別化と学校の社会化という2つの方向をどのように関連づけるかは新教育運動における教授理論の課題であった。ドルトン・プランやウイネトカ・プランは、一般に個別化の方法と見なされることが多いが、それらが1920年代に大きな注目を集めたのは、この2つの方向を含んでいたからにはほかならない。1920年代末のアメリカの教育概況を記した連邦教育局報告書は、ドルトン・プランとウイネトカ・プランを例にあげて、個別教授法が普及しつつある現況を指摘しながらも、「学校の中の共同体生活をこわしたり、子どもの社会化を阻害したりする方法は、どんなものであれ決して注目されることはない」ことに注意を促していた。²⁾ 事実、ドルトン・プランは自由と共働というふたつを基本原理に含んでいたのである。³⁾

そのことは、ドルトン・プランに関する紹介や研究にも反映している。自由と共働という2つの原理のいずれを重視するかによって、ドルトン・プランが個別化のための方法であることを強調するものと、共同社会をつくるための方法であることを強調するものとに分類できる。前者の例としては、キルパトリックやイギリスのリンチなどがある。⁴⁾ この見解は、近年では一般化しており、ドルトン・プランは「個人差に直接対応する個別教授⁵⁾」と見なされるのが普通とよいだろう。⁶⁾ また、ドルトン・プランが自学の方法であることを強調した紹介もドルトン・プランの自由の原理に着目している。⁷⁾ 後者の例は大正時代の紹介の中に多い。我が国における代表的な紹介者であった赤井米吉、中国での普及の指導者であった舒新城なども、この点に着目していた。⁸⁾

このように、ドルトン・プランの評価は多様であるが、これらの研究にほぼ共通する2つの欠陥がある。ひとつは、ドルトン・プランの解釈をヘレン・パークースト（Helen Parkhurst, 1886-1973）の『ドルトン・プランの教育』（1922）のみによっていることである。この書物は多くの国で翻訳され、最もよく読まれた

I 研究論文

重要な書ではあるが、じつはパーカーズの理論を正確に述べたものではなかった。たとえば、同書ではドルトン・プランの原理として、自由の原理、共働の原理という2つの原理を挙げているが、パーカーズは、同書以外では、つねに、第3の原理として、自己計画の原理を挙げている。この第3原理を明示しておらず、エマーソンを長々と引用するなど自由を過度に強調していた点で、同書はドルトン・プランにかんする偏った説明であった。ドルトン・プランの評価を同書のみで依拠することはできない。もうひとつの欠陥は、ドルトン・プランの成立過程とパーカーズの思想形成の過程を無視していることである。そのため、ドルトン・プランの歴史的意義も、進歩主義教育におけるドルトン・プランの位置もあいまいなままである。⁹⁾

本稿の課題は、ドルトン・プランの成立過程を分析し、ドルトン・プランの教育思想史的系譜を明らかにすることである。ドルトン・プランがアメリカの進歩主義教育を代表する実践のひとつであることは誰も認めるであろうが、それがどのような思想的背景をもって出現したのか、これまでの研究では明らかではない。そしてそのことは、ドルトン・プランが教育の個別化のための方法であるか、学校を社会化するための方法であるかをめぐる評価の分裂の原因になっている。ドルトン・プランの成立過程の解明という本稿の作業は、ドルトン・プランにおいて個別化と学校の社会化とがどのような関係にあったかを明らかにするはずであり、また、それは進歩主義教育の教授理論の特質の解明にもつながるはずである。

1 起源としての児童研究——青年期の試行

ドルトン・プランの創始者であるヘレン・パーカーズは、1886年3月8日にウィスコンシン州のデュランドで生まれた。¹⁰⁾ 1904年にハイスクールを卒業し、ただちに地元の小学校の教員になった。学校の生徒数は40人で、それが8学級に分かれていたが、彼女はひとりで全員をひとつの教室で教えなければならなかった。このときに彼女は、教室の隅にそれぞれ異なる教科別の学習場所を設ける方法を工夫した。彼女がひとつの学級の生徒を教えている間、ほかの学級の生徒は教科別の学習場所で、学年の違いを越えて協力して自習したのである。この方法は、萌芽的ではあるが、教科別実験室、自発的学習、生徒相互の協力、というドルトン・プランの要素をすでに含んでいた。¹¹⁾

ドルトン・プランの成立過程とヘレン・パーカーストの思想形成

パーカーストは1905年から07年まで、ウィスコンシン州立リバーフォールズ師範学校で学び、4年の課程を2年半で修了した。のちに彼女が語ったところによると、同校で学んでいた時に、自由、集団の交流、自己計画 (budgeting of time)¹²⁾ という3つを教育の基本原理にすえる「革命的な」方法、すなわち後のドルトン・プランを構想し始めたという¹³⁾。同師範学校でパーカーストが主に学んだのは、体育 (30)、ドイツ語 (30)、唱歌 (20)、音楽 (15)、朗読 (20)、心理学 (10) などであった。括弧内は学んだ期間の月数である。修了したときのパーカーストの論文のテーマは「子どもの心」であった¹⁵⁾。また、時期ははっきりしないが、このころ、表現を重視するデルサルト体操に興味をもち、2年間にわたって個人的な訓練を受けていた。さらに、卒業後だが、1911年にワシントン州タコマ市の教育委員会に提出した調書には、体育と心理学を教えたいとの希望を明記している¹⁶⁾。これらの記録は、当時の彼女が3 R'sなどの伝統的な教科内容の伝達よりも、体育、音楽、子どもの心理など、子どもの自発的な活動や表現に関心をもっていたことを示している。以上の経歴からわかるのは、明確な理論に基づいているとは言えないにしても、パーカーストは教育における自発性と共働、自由な活動と表現を重視していたということである。

パーカーストは、1907年6月にリバーフォールズの師範学校を卒業したのち、ウィスコンシン州ハドソンで、小学校の1年生担当の教員として勤務し、1908年にはハイスクールでの教員養成部門の仕事も兼任した¹⁷⁾。そのころエドガー・ジェイムズ・スウィフト (Edgar James Swift, 1860-1932) の著書『精神の形成過程』を読んで教育的実験室という考え方を学び、これがドルトン・プランの成立に重要な影響を与えた¹⁸⁾。スウィフトは、児童研究の中心地であるクラーク大学で児童研究を学んで1903年に学位 (Ph.D.) を取得し、1903年からミズーリ州のワシントン大学で心理学と教育学を担当していた。児童研究は子どもの自由な身体活動や自発性を最大限に保障することで子どもの自然な発達を促すことをめざしていたから¹⁹⁾、その思想にパーカーストは共感をもったはずである。

そこで、パーカーストがスウィフトから学んだ実験室の意味を確かめてみよう。

『ドルトン・プランの教育』の中でパーカーストがスウィフトの著書から引用した箇所は、彼女がスウィフトから何を学び取ったかを示している。引用のなかでパーカーストがあえて強調を加えた部分を抜き出してみよう。パーカーストは、

I 研究論文

「教師が眉をひそめるような性質をもった子どもでも、教師を越えるような人間になる芽をもっているかもしれない²⁰⁾」と、子どもの可能性と創造性に期待を表明し、「環境をとおして示唆を与えることの影響の大きさは、教育ではまだ十分に認められていない²¹⁾」という現状を批判して、環境の重要性を指摘した。その上で、「合理的な教育方法は、教師が生徒とともに学習し、自発的にものごとを探求したがるように生徒を鼓吹すること²²⁾」であると述べ、教師と生徒の協力関係と自発性を重視した教育方法を提案したのである。このような、子どもが自発的に学習し、協力的な関係ができていく環境が教育的実験室であった。こどもの自発性と環境の整備の重要性を確認した点で、パーカーは児童研究を継承していたと言える。だが同時に、子どもの創造性や協力関係の構築を強調した点では、のちの進歩主義教育へとつながる傾向も含んでいた。

1909年9月に、パーカーはワシントン州タコマ市のエディソン小学校に赴任した。パーカーは第一学年の35名の生徒を担当し、読書の時間にフォークダンスを導入したり、地理の時間に子どもを野外に連れて行ったりする斬新な授業を行い、学校中の注目を集めた。彼女の授業を観察したA.H.ヨダー（Albert Henry Yoder, 1866-1940）教育長は、彼女の実践を高く評価し、励ましを与えた。1910年6月のタコマ・スタジアムの完成を祝うフェスティバルでは、教育長の推薦により、パーカーが生徒のダンスを指揮して大成功を収め、パーカーは教育委員会から表彰された²³⁾。ヨダーは1893-94年にクラーク大学の研究員として児童研究に取り組み、1895年から1901年まで、『児童研究月刊誌』（*Child Study Monthly*）の編集長を務めるなど、西海岸での児童研究の指導者の一人であった。したがって、子どもの身体的活動や表現を重視したパーカーの授業や指導方法に対して、児童研究に造詣の深い教育長が共感をもったのである。

こうして教育長の信頼と許可を得たうえで、1910年にパーカーは、1年生から4年生までの生徒約100人を対象に、実験室案（laboratory system of education）を実施した。まず、教室を教科毎の実験室にし、各実験室にはその教科担当の教師をおいた²⁴⁾。この環境の中で行われた実践によって、のちのドルトン・プランにつながる3つの原理が確立した²⁵⁾。3つの原理とは、第一に、実験室内に、異なる学年の生徒が混在した小集団ができ、生徒がお互いに協力して学習すること、すなわち、集団生活の交流の原理（interaction of groups）である。第

二に、一人一人の生徒が自主的に実験室を選択することができること、すなわち自主性の原理 (initiative)²⁶⁾ である。第三に、時間割には60分毎の区切りなどがなく、生徒が気の済むまで同じ実験室で学習することができることである。これは、自己計画の原理 (budgeting of time) である。

以上のことから明らかなように、ドルトン・プランの起源とされるタコマでの実験室案は、児童研究を実践に応用したものと見なすことができる。集団生活の交流、自主性、自己計画という3原理は、実験室という環境のなかで子どもが自発的な学習に取り組むための方途であった。

II モンテッソーリから学んだもの——自由の原理

タコマでのダンス指導と実験室案の実践で注目を集めたパーカーは、いくつかの師範学校から誘いを受け、1912年にウイソコンシン州立スティーブンス・ポイント師範学校の初等教員養成部門の教員に転任した。スティーブンス・ポイントに在職していたのは1912年から15年までの短い間だが、この間に、彼女はモンテッソーリの理論を学び、新たな思想的な展開をとげた。

1912年前後は、アメリカは熱狂的なモンテッソーリ・ブームの中にあっ²⁷⁾た。パーカーはモンテッソーリ・メソッドに関心をもち、1914年1月からその年の夏まで、モンテッソーリ・メソッドを研究するために²⁸⁾、イタリアおよびドイツに留学した。その間にローマで開かれた第2回国際モンテッソーリ教師養成コース²⁹⁾に出席した。帰国後は、中西部モンテッソーリ同窓会の会長となり、全米の各地でモンテッソーリ法普及のための講演を行なうなど³⁰⁾、1918年1月まで、アメリカにおけるモンテッソーリ教育の指導者として活躍した。

モンテッソーリはパーカーに対して特別に篤い信頼をおいていた。サンフランシスコで開かれたパナマ太平洋万国博覧会において、1915年8月から11月まで開かれたモンテッソーリ・モデル・スクールの指導を全面的にパーカーに任せたことはその現れであった。パーカーはこのモデル・スクールで、3歳児から6歳児までの35名を4カ月間指導した。博覧会の記録によれば、彼女は子どもへの強制や抑圧を排除し、子どもが自分の選んだ仕事を自分の方法で続けるように仕向け、子どもは多くの見学者の存在すら忘れて仕事に集中し、自発活動の中から自己統制が現れたとい³¹⁾う。

I 研究論文

1915年12月8日には、パーカーは、モンテッソーリによって、アメリカにおけるモンテッソーリ教育監督者（United States Montessori Supervisor）に任命され、ステイブンス・ポイント師範学校の教員を辞職して、モンテッソーリ運動に没頭することになった。その際、モンテッソーリは自ら、「ヘレン・パーカーは、私の方法と教具の使用法について、完全に理解し、共感していることを確信しています。……私の方法と教具をアメリカ合衆国で使用する教師はすべて、上にのべた結果（モンテッソーリ法の普及……筆者）を得るために全面的に彼女に協力するであろうことを信じています。そこで、私は、ヘレン・パーカーをアメリカ合衆国における教師の監督者に任命します」という証明書をモンテッソーリ教育の関係者に送付している³²⁾。パーカーは、アメリカのすべてのモンテッソーリ・スクールの教員研修から財政上の問題まで含めて、監督責任を引き受けたのである³³⁾。さらに、1916年10月にニューヨークに開校したモンテッソーリ師範大学の設立と運営の中心としても尽力した³⁴⁾。モンテッソーリ・メソッドがドルトン・プランに直接に受け継がれたとは言えないにしても³⁵⁾、以上のようなパーカーとモンテッソーリとの親密な協力関係をみれば、モンテッソーリ・メソッドがパーカーの思想に与えた影響を過小評価することはできない。

モンテッソーリがパーカーに与えた影響の中で、ドルトン・プランの成立にとって重要な意味をもっているのは、次の2点であろう。第一は、子どものリズムを自発性の根拠としたことである。第1章でみたように、子どもの自発性は児童研究のなかで既に強調されており、パーカー自身のタコマでの実践においても、自発性の尊重は基本原理のひとつであった。しかし、児童研究の場合、自発性の根拠は本能や反復説におかれていた。これにたいして、モンテッソーリは、子どもを実際に観察することによって、「自然が子どもにリズムを与えている」ことを確認し、そのリズムに従う教育を主張した。リズムに従おうとすれば、時間割をあらかじめつくって子どもの活動を分断することは有害であった。パーカーは、「子どもが自らの意志を発展させるのは、単になんらかの仕事を選択して遂行しようと決心することによってではなく、選択したことを続けることによって可能になる」と、モンテッソーリ・メソッドを解説するなかで述べている³⁶⁾。時間割を廃止して、子どもの主体的な学習の連続性を保障することは、ドルトン・プランのなかで、実現が目指されることになる。

ドルトン・プランの成立過程とヘレン・パーカーの思想形成

第二は、環境に秩序を持たせることの重要性である。環境の重要性も既に児童研究において主張されていたが、それは、子どもの自由で自発的な活動ができる限りそのまま保障するための条件であった。自発的な活動を束縛するものを排除すればよかった。これに対して、モンテッソーリは、「子どもは、目的を持たずに活動しているときは自由ではない³⁷⁾」と述べ、自由であるとは目的をもった活動を行うことであると考えていた。目的をもった活動は、秩序だてられた環境のなかではじめて可能になる。「我々にできるのは最高の環境を子どもにあたえるか、あるいは子どもが最高の環境を獲得するのを援助することだけです³⁸⁾」とモンテッソーリは語り、環境整備をモンテッソーリ・メソッドの眼目とした。環境の整備は、ドルトン・プランの最大の課題となるのである。

たしかに、自発性の尊重と環境整備の重要性を、パーカーはモンテッソーリを知る以前から児童研究を通して認めていたし、そのことがパーカーがモンテッソーリの思想に共鳴した大きな理由であったと考えられる。しかし、1910年代のアメリカにおいて児童研究は既に説得力を失っていた³⁹⁾。そのとき、児童研究に代わって、モンテッソーリ・メソッドは、自発性がリズムによって支えられており、環境を秩序だてることが教育であるという考え方の理論的根拠となった。そしてその考え方がドルトン・プランの自由の原理に受け継がれるのである。

III バークから学んだもの——自己計画の原理

パーカーは1915年の8月から11月まで、パナマ太平洋万国博覧会でモンテッソーリ・モデル・スクールを指導していたときに、サンフランシスコ州立師範学校のフレデリック・リスター・バーク学長 (Frederic Lister Burk, 1862-1924) と頻りに会った。バーク学長はモンテッソーリ・メソッドについてパーカーから学び、パーカーは、バークが開発した個別教育法 (individual instruction) を直接に学んだ⁴⁰⁾。二人の交流はそれ以来、バークが亡くなる1924年まで続いた。モンテッソーリがコマーシャルイズムに走っていることを指摘し、モンテッソーリから独立することを強く勧めたのはバークであった⁴¹⁾。

バークは、クラーク大学のG.スタンレー・ホール (G. Stanley Hall, 1844-1924) のもとで児童研究を学んで1898年に博士号を取得し、カリフォルニア州サンタ・バーバラの教育長をへて、1899年から1924年に亡くなるまでサンフランシスコ州

I 研究論文

立師範学校の初代学長を務めた。1912年ころから、自分自身の理論に基づいて個別教育法を開発し、パーカーストに会った当時は、実験を続けていた最中であった。個別教育法は、子どもに教科別のワークブックを与え、それを生徒がそれぞれのペースで自己訂正しながら学習するという方法であった。⁴²⁾

パークも、子どもの自発性の尊重、および、環境の整備、という2点で、モンテッソーリの思想に共鳴していた。パーカーストがパークに送ったモンテッソーリの講演録⁴³⁾に対する返事のなかで、パークは、「(講演録は) 本当に彼女(モンテッソーリ)の言うとおりの、あらゆる教育の正真正銘の根本原理を発見したものだ」と、私は考えます。つまり、彼女のいう注意の集中(polarization of attention)、私自身の表現では、自発的思考(dynamic thinking)こそ根本原理です。このような心の状態を利用した教育はいままで行われたことはありません。しかし、それを利用しない限り、教育の大きな進展はあり得ないでしょう。モンテッソーリの言うとおりで⁴⁴⁾と、モンテッソーリの注意の集中と自分の自発的思考との類似性を自ら認めていた。モンテッソーリ自身はその講演録の中で、「子どもの注意力が外界の物または事実とつよく結び付いているという事実、そのことが……複雑だが自発的な活動が子どものなかにあることを証明している⁴⁵⁾」と述べ、自発的活動にもとづく自動教育(auto-education)を提唱していた⁴⁶⁾。自発性の重視という点で、二人の思想は一致していたのである。

さらに、子どもの自発性を保障するための環境整備を教育の目的とした点でも、二人の思想は共通点をもっていた。モンテッソーリ・メソッドの眼目は、「人間の内的法則」に従うように、「よく秩序だてられた環境」を用意することであった。パークの個別教育法も、子どもが自発的にかつ自力で学習することができるような環境を作り出すことがねらいであり、モンテッソーリ・メソッドの目指すところと同じであった⁴⁷⁾。このように、パーカーストはパークを通して、あらためて自発性および環境整備の重要性を確認したということができる。

個別教育法を実施する際に採用された自己信頼プラン(self-reliant plan)は、ドルトン・プランの自己計画の原理につながるものとしてとくに重要である。それは、一定の能力があると教師に判定された生徒(self-reliant pupil)には、時間割を無視して、自分で学習計画をたてることを許すという方法であった。決められた最低限の教科内容を習得している限り、時間の使い方は生徒の自由に任せ

ドルトン・プランの成立過程とヘレン・パーカーの思想形成

た。「生徒は自分自身の判断で、ある教科を、自分の気の済むように、長時間学習しても、短時間で終わらせてもよかった⁴⁸⁾」のである。樋口長市は、ドルトン・プランは「この自願生案を普遍化したものにすぎない」と説明している⁴⁹⁾。

パーカーは、1916年3月8日付けの手紙で、自分が構想していた方法をパークに説明している。その内容を見ると、この時点でドルトン・プランがほぼ完成していたことがわかる。手紙の一部は以下のとおりである。

あなたに手紙を書くのが遅れたのは、実際にかかなりの長い手紙を書きたかったからです。……私がずっと構想してきたちょっとした計画を提案して、自分の計画が可能なものであることを確かめたいのです。……私は、子どもが全く邪魔されることなく最高の学習ができるような状況で学習する機会を持つようになることに、関心をもっています。……

私は今までと違った方法で子どもを寄せ集めたりしませんし、従来よりも多くの部屋が必要でもありません。いうならば、算数の部屋がひとつかふたつ、歴史、地理、読書等の部屋がいくつか必要になるくらいです。第4学年以上では、すべての生徒が自分自身の学習を選択するのを許します。学習の始めには、彼らに学習メニューカードを与えることが必要です。数日後には、生徒は書き込み用カードを与えられ、それに自分自身の進捗と割り当て仕事を示します。私は少年にも少女にも最初に一定量の学習内容を割り当てますが、その学習がなされるための一定の時間を割り当てはしません。それは学習の順序が重要ではないとの全く新しい考え方です。というのは、今までは一般には学習内容は一定した明確な割り当てがなく、時間は明確に割り当てられていたからです。……子どもは割り当て仕事のメニューを見て、その日に割り当てられた量の仕事を成し遂げるまで、自分の行きたい部屋に行ってもよいし、そのままその部屋にいてもよいのです。……

これらの部屋は図書館のようなものであって、机ではなく、テーブルを置いておきます。……教師は本当の生きた参考書であり、状況についてはるかに正確な見通しを持つことができるはずです。……

子どもが理性的に考え、学習の順序を決め、それによって自分の進捗を判断し、それを他の仲間の進捗と比較できるような状況に、自分自身をおくことができるならば、生徒はあっという間に熱心に学習するし、あっという間に興味と情熱が

I 研究論文

沸くに違いありません。(後略。アンダーラインは筆者)

『ドルトン・プランの教育』(1922)の説明と比較すれば、教科ごとの部屋は実験室に、学習メニューカードは課業表(アサインメント)に、書き込み用カードは進度表に、相当する。子どもが割り当て仕事をこなしている限りは、自由に部屋を変わることができるのは、ドルトン・プランと同じである。さらに、第4学年以上を対象としてこの計画を作っていることにも注目しなければならない。実はパーカーはサンフランシスコにいたときに、バーク学長の好意で、9歳から12歳の生徒を対象にした実験室案を実施したことがあった⁵⁰⁾。その延長として、この手紙にあるような方法を提案したと考えられる。このドルトン・プランの原案ともいべきものを、真っ先にバークに提示したことが、バークの影響の大きさを示している。バークの個別教育法を参考にすることによって、ドルトン・プランは大きく完成に近づいたのである。

IV デューイから学んだもの——共働の原理

モンテッソーリ運動から手を引いたのち、パーカーはバークに励まされ、再び自分自身の実験室案の開発に取り組んだ。彼女は、すでに「教育の個人的側面については十分な研究を重ねたと思ったので、今度は学校を社会的側面から研究することに全精力を集中し」た。その成果は進度表であった。進度表には、個人の進捗を示す児童進度表、学級の中でのひとりひとりの進捗を示す実験室進度表などがある。生徒は進度表をお互いに比較し合い、年齢の違いを越えて、助け合ったり、協力したりして、「集団作り」と「集団と集団との交流を完全なものにする⁵²⁾」ことができた。

年齢の異なる生徒相互の協力や交流は、ウィスコンシンの田舎の小学校で実験室案をはじめて実施したときからパーカーが強調したことではあったが、それに確かな理論を与えたのはジョン・デューイであった。パーカーはデューイの言葉を引用しつつ「実際の社会生活は……協力と相互作用であること⁵³⁾」を強調し、そのうえで、「生徒が自ら楽しんで、自然に社会の一員として行動する⁵⁴⁾」ような方法を探求した。そこで、実験室のなかで、異なる学年の生徒が同じテーマで協力したり、年長児が年少児を援助したりすることを奨励した⁵⁵⁾。また、午前

ドルトン・プランの成立過程とヘレン・パーカーズの思想形成

中と午後の間に会議の時間を設け、各生徒がそれぞれ自分の抱える問題を出し合⁵⁶⁾って、話し合う機会にした。実験室案は、デューイの影響を受けて、このような社会的側面をも重視し、ドルトン・プランの基本原理のひとつである共働の原理を確立したのである。

「学校の社会的側面」の研究は、「集団生活の交流」という方法の基礎となっただけではない。学校を「社会学的実験室」と見なし、実験室案の目的をコミュニティ形成として明確に示すことにもなった。パーカーズは、「ドルトン・プランの目的は総合的なものである。それは学校全体を一つのコミュニティとして機能させるための簡単で、経済的な方法を提示している。生徒のよく生活し、学習する状況が、かれらの環境の主要な要素である⁵⁷⁾」と述べている。コミュニティの中では、生徒が自発的に研究し、相互交流し、協力することができる。そのような「協力的コミュニティ」を作り出すことがドルトン・プランの目的であるとし、それを「学校の社会化」と表現した⁵⁸⁾。そして、「学校の社会化が、子どもの解放と同じように、この実験（ドルトン・プラン）が成功するために最も重要なことである⁵⁹⁾」と考えた。ジョン・デューイの娘であり、パーカーズの親友でもあったエベリン・デューイは、ドルトン・プランの社会的側面を特に強調している⁶⁰⁾。このように、「学校の社会化」は子どもの自発的活動を保障し、生徒の相互交流と協力を促進することを含んでいた。そのような環境づくりが、コミュニティ形成であり、ドルトン・プランの目的であった。

パーカーズは、1919年に「1910年にタコマで実施したものを発展⁶¹⁾」させて、かつてのモンテッソーリ師範大学の附属学校をもとに、第4学年から第8学年までの年長児を対象とする学校を設立した。これが児童大学の起源である。また、同年の秋には、マサチューセッツ州パークシャーにある障害児を対象とした学校で実験室案を実施し、さらに翌20年2月には、マサチューセッツ州ドルトンの公立ハイスクールで、実験室案を実施した。

これ以後のドルトン・プランについては、パーカーズの『ドルトン・プランの教育』およびエベリン・デューイの『ドルトン実験室案』に詳しく紹介されており、説明の必要はないであろう。ただ、ドルトン・プランの名称の由来となったドルトンのハイスクールでの実践の重要な点のみ確認しておこう。実験室は教科別であり、生徒は自分の立てた計画にしたがって、実験室の間を移動する。実

I 研究論文

験室の四隅には大きなテーブルがあって、そこでは生徒の共働学習が行われる。同校のジャックマン校長は、教師の役割として、教室内の学習の雰囲気を維持すること、アサインメント（課業表）について詳細に説明すること、実験室の設備の使い方を指示すること、問題に挑戦する方法を示唆すること、必要に応じて教科内容の説明をすること、という5点をあげている⁶²⁾。ドルトン・スクールにおける教師の役割が生徒の自発的学習を援助するための環境づくりにほとんど限定されていることがわかる。

V 結論

ドルトン・プランの成立過程をまとめておこう。まず、ドルトン・プランは児童研究を継承し、発展させたものであった。実験室の概念を示したスウィフト、パーカーストに実験室案の実施を促したヨーダー、さらに、ドルトン・プランの基礎となった個別教育法をパーカーストに伝授したバーク学長など、いずれもアメリカにおける児童研究運動の指導者であった。パーカーストは、彼らの研究や実践を通して児童研究の成果を学び、子どもの自発性を尊重することの重要性を確信し、そのための環境整備の方法として、実験室案を考案した。とくにバークの個別教育法は、ドルトン・プランにおける自己計画の原理へと直接につながっている。

パーカーストはモンテッソーリの理論によって、人格のリズムという言葉で子どもの内的衝動や自発性を科学的に説明し、自由の原理の根拠とした。また、モンテッソーリの理論は、当時すでに説得力を失っていた児童研究に代わって、環境の重要性を強調する根拠にもなった。モンテッソーリ理論は、児童研究から発展したパーカーストの思想を補強したとみることができる。

ドルトン・プランが児童研究の思想と大きく異なっている点は、共働の原理を強調した点である。パーカーストは早くから共働を重視した実践を行っていたが、それに理論的根拠を与えたのは、ジョン・デューイであった。教育を個人的側面からだけでなく、社会的側面をも考慮に入れることによって、児童研究から出発した実験室案が、進歩主義教育を代表するドルトン・プランへと発展したのである。この意味で、ドルトン・プランは児童研究と進歩主義教育を架橋したといえることができる。

ドルトン・プランの成立過程とヘレン・パークーストの思想形成

進歩主義教育を代表する実践であるドルトン・プランは、教育を個別化した実践として広く知られているけれども、以上のような成立過程を確認すれば、ドルトン・プランを個人差に応ずるための個別教授法とみなすことはできない。ドルトン・プランの目的は、ひとつには、児童研究のなかで強調されていたように、子どもの自発的な学習を可能にするための環境整備であり、もうひとつには、デューイが強調していたような生徒相互の協力的関係をつくることであった。パークーストはドルトン・プランの目的を「学校の社会化」と表現したが、それはこの2つの意味を含んでいたのである。この点において、ドルトン・プランは児童研究と進歩主義教育をつないだと言することができる。

註

- 1) Boyd, William & Wyatt Lawson : *The Story of the New Education* (1965), 国際新教育協会訳『世界新教育史』(玉川大学出版, 1966年), 77-80頁; Lynch, A. J. : *Individual Work and the Dalton Plan* (London : G. Phillip & Son, 1924); 舒新城(阿部洋訳): 「ドルトンプランにおこりやすい弊害」『中国近代化論』(明治図書, 1972年)所収。原著は1923年7月発行の『中華教育界』; 山口喬: 「1920年代ソビエトにおける『新教育』の受容と変容」『日本の教育史学』第28集(1985年)131-150頁; 中野光: 『大正自由教育の研究』(黎明書房, 1968年)190-203頁
- 2) Deffenbaugh, W.S. : "Significant Movements in City School Systems", *U.S. Department of the Interior, Office of Education Bulletin*, 1930, No.16, 94
- 3) Parkhurst, Helen : *Education on the Dalton Plan* (London : G.Bell and Sons, 1922), chap.2. 中野光編赤井米吉訳: 『ドルトン・プランの教育』(明治図書, 1974年)
- 4) Kilpatrick, William H. : "An Effort at Appraisal", *24th Yearbook of the NSSE*, Part II (1925), 273-286. Lynch, A.J. : op.cit.
- 5) 佐藤隆之: 「キルパトリック教育思想における『協同』概念の再検討—個別教授批判をてがかりとして—」『教育哲学研究』第76号(1997年), 138頁
- 6) 他に次のような研究がある。Cremin, L.A. : *The Transformation of the School: Progressivism in American Education, 1876-1957* (New York : Alfred A. Knopf, 1961), 三笠乙彦: 「教育における個別化の思想」吉田昇他編『近代教育思想』(有斐閣, 1979年)188-218頁, 小澤周三: 「教育方法における個別化」吉田昇他編『教育方法』(有斐閣, 1979年)151-172頁
- 7) 樋口長市: 『意的生命論に立脚せる余の自学主義の教育 附米国の自学主義の教育』(目黒書店, 1925年)。
- 8) 赤井米吉: 『ドルトン案と我国の教育』(集成社, 1924年); 舒新城: 前掲論文。

I 研究論文

- 9) かなり詳細にパークーストの思想形成を追ったレイガーの研究は、多くの重要な伝記的事項を含み参考になった。しかし、進歩主義教育と児童研究との関係や、教育の個別化とドルトン・プランとの関係など重要な論点が解明されないままになっている。また、ドルトン・スクールの歴史を扱ったシメルの研究は、パークーストの思想形成についてはほとんど分析がない。Lager, Diana: "Helen Parkhurst and the Dalton Plan: The Life and Work of an American Educator", Ph.D.diss. University of Connecticut, 1983; Semel, Susan F.: *The Dalton School: The Transformation of a Progressive School* (New York: Peter Lang, 1992)
- 10) 通説では、1887年である。これは彼女自身が1963年ころに書いたと思われる履歴書の記述（以下、履歴書はこれを指す。Stevens Point Archive 所蔵）と一致する。しかし、ウィスコンシン州ペピン郡に届けた出生届（1886年3月18日提出）、およびその修正（1963年1月22日提出）、彼女がタコマの教育委員会に提出した自筆の履歴書の記述（1911年5月1日提出）などから、1886年の方が正しいと判断した。
- 11) Parkhurst: *Education on the Dalton Plan* (1922): chap.1.
- 12) 時間の使い方を自分で決めるという意味であるので、このように意識した。
- 13) Miller, Shirley: "New York Tacomans", *The Tacoma News Tribune*, Jan. 28, 1940.
- 14) レイガーによると、彼女はここでジェイムズの心理学を学んだという。Lager: op.cit. 72-74. ジェイムズの意識の流れという考え方にしたがえば、パークーストが時間割の不合理を感じ取ったのは納得できる。
- 15) Wyman, Walker D.: *The Distinguished Alumni of the University of Wisconsin-River Falls* (River Falls, Wis.: University of Wisconsin-River Falls Press, 1993) 8.
- 16) 以上は、パークーストが1911年5月1日にTacoma市教育委員会に提出した自筆の履歴書による。タコマ市教育委員会所蔵。
- 17) Parkhurst's letter to A.H.Yoder, April 24, 1909. タコマ市教育委員会所蔵。
- 18) Parkhurst: *Education on the Dalton Plan*, 8; Swift, Edgar James: *Mind in the Making* (New York: Charles Scribner's Sons, 1908).
- 19) 児童研究については、Hendricks, James Dale: "The Child-Study Movement in American Education, 1880-1910: A Quest for Educational Reform Through a Scientific Study of the Child", Ph.D.diss. Indiana University, 1968. 参照。
- 20) Swift: op.cit. 297
- 21) Ibid. 298
- 22) Ibid. 300; Parkhurst: op.cit. 9. アンダーライン部がパークーストがイタリック体を用いて、あえて強調した部分である。
- 23) Miller, Shirley: "New York Tacomans", *The Tacoma News Tribune*, Jan. 28, 1940
- 24) Miller: op.cit. Jan. 28; McGovern's letter to Hattie Selling dated on April 23, 1925, in Miscellaneous papers # 352, Yale University Archives.

ドルトン・プランの成立過程とヘレン・パーカーの思想形成

- 25) Miller : op.cit. Jan.28, 1940 ; 履歴書でも、タコマでの実践をドルトン・プランの始まりとしている。
- 26) ここでは、freedomではなくinitiativeが用いられている。このことは、ドルトン・プランにおける自由の原理が自発性の原理と言い換え可能であることを示している。
- 27) 清水貞夫：『モンテッソーリ法』のアメリカへの受容とその問題』『宮城教育大学紀要』第8巻（1974）163-189頁；Kramer, Rita : *Maria Montessori: A Biography* (1976), 平井久監訳：『マリア・モンテッソーリ』（新曜社,1981年）10-14章参照。
- 28) 後年、パーカーは、イタリアに行ったのは人類学を学ぶためであったと強調している（“Former Hudson Teacher, 86, Dies ; Was World Renowned Educator”, *Hudson Star Observer*, June 14, 1973 ; 履歴書）。しかし、彼女の留学に関する同師範学校の記録を見ると、パーカーは「モンテッソーリ法の研究を深めるために」ヨーロッパに行ったと記されている。*The Normal Pointer*, Vol.19, No.3 (March, 1914).
- 29) Parkhurst : “Notes on Dr. Montessori’s Lectures” パーカーが1914年3月から4月にかけてローマでモンテッソーリの講義を聴講したときの筆記録（Stevens Point Archives所蔵）である。以下筆記録と略す。
- 30) “Miss Parkhurst’s Trip”, *The Normal Pointer*, Vol.20, No.6 (Jan. 15, 1915) ; “Primary Notes”, *The Normal Pointer*, Vol.20, No.14 (April 30, 1915).
- 31) Todd, Frank Morton : *The Story of the Exposition, published for the Panama-Pacific International Exposition Company* (New York : G.P.Putman’s Sons, The Knickerbocker Press, 1921) 65-67.
- 32) この証明書は、Yale University Archives, Oberlin College Archives などに残っている。
- 33) Parkhurst’s letter to the Montessori Alumni and friends of the movement, Dec.20, 1915, Clara May-Montessori Files, in the Oberlin College Archives.
- 34) Parkhurst’s Letter to Clara May, Aug. 5, 1916 in the Oberlin College Archives; Lager : op.cit. 109-123.
- 35) モンテッソーリ法とドルトン・プランとの関係を否定的にとらえる研究は少なくない。たとえば、Adams, John: *Modern Developments in Educational Practice* (London: University of London Press, 1922), 124; Standing, E.M. : *Maria Montessori* (1957), クラウス・ルーメル監修『モンテッソーリの発見』（エンデルレ書店, 1975年), 109頁など。
- 36) Parkhurst: “Montessori System,” *Stevens Point Daily Journal*, May 15, 1915.
- 37) 筆記録 p. 46.
- 38) Parkhurst: “Montessori System,” ; 筆記録 p.38.
- 39) 児童研究が衰退した原因については、Hendricks : op.cit. chap.VIII 参照
- 40) Washburne, Carleton: “The Winnetka Plan of Individual Work”, *Teachers World* (London), Dec.20 and 27, 1922, 612.
- 41) Burk’s letter to Parkhurst, April 30, 1917, and May 5, 1917, cited in Lager, op.cit. 121.

I 研究論文

パーカーがモンテッソーリから独立した理由としては、パーカーの関心が幼児よりも小学校高学年に移ったこと、キルパトリックを代表とするアメリカにおける厳しいモンテッソーリ批判、モンテッソーリ教育監督者としての実務的仕事の煩雑さに嫌気がさしたことなどが考えられる。詳細については別に考察したい。

- 42) 詳細は拙稿：「アメリカ合衆国における自学主義教育の展開——斉授業の改革としての個別教育法——」『兵庫教育大学研究紀要』第18巻（1998年2月）および「フレデリック・リスター・パークの教育思想における自発性の原理——児童研究と進歩主義教育の間——」『教育学研究』第65巻第2号（1998年6月）。
- 43) Montessori, Maria: "My System of Education", *Journal of Proceedings and Addresses of the NEA* (1915), 64-73を指す。
- 44) Burk's letter to Parkhurst, Aug. 21, 1915, Yale Univ. Archives.
- 45) Montessori : op.cit. 65.
- 46) Ibid. 64-73.
- 47) 拙稿: 「フレデリック・リスター・パークの教育思想における自発性の原理」参照。
- 48) Burk : *Individual Instruction vs. the Lockstep System* (F.A.Owen Publishing Co., 1917) 19.
- 49) 樋口長市 : 前掲書, 370頁。
- 50) Parkhurst's letter to Burk, dated on March 8, 1916, cit. in Lager, op.cit. 131-133.
- 51) Parkhurst : *Education on the Dalton Plan*, 12, 邦訳24頁。
- 52) Ibid. 12-13, 邦訳24-25頁。
- 53) Parkhurst : "The Dalton Plan", *Times Educational Supplement*, July 2, 1921.
- 54) Parkhurst : *Education on the Dalton Plan*, 17, 邦訳29頁。
- 55) Parkhurst : "History——The Dalton Plan", *The New Era*, Vol.11 (Oct.,1930), 105-111.
- 56) Parkhurst : "The Dalton Laboratory Plan", *24th Yearbook of the NSSE*, Part II (1925), 83-94.
- 57) Parkhurst : *Education on the Dalton Plan*, 24, 邦訳35頁。
- 58) Parkhurst : "The Dalton Laboratory Plan", 83.
- 59) Parkhurst : *Education on the Dalton Plan*, 38, 邦訳48頁。
- 60) Dewey, Evelyn : *The Dalton Laboratory Plan* (New York: E.P. Dutton & Co. 1922) chap.1.
- 61) Parkhurst's letter to Burk, May 12, 1919, cit.in Lager, op.cit. 125.
- 62) Jackman, Ernest : "The Dalton Plan", *The School Review*, Vol.28, No.9 (Nov.1920), 690.